

「職業奉仕の森」にはどんな木々が生えているのか

職業奉仕を一本の大木ととらえて説明をしようとするから、「職業奉仕は難しい」ものとなるのであって、職業奉仕の内容は、歴史上の積み重ねも考えればさまざまな側面を持っている、つまり、「職業奉仕の森」にはいろいろな木々が生えているのであって、その一本一本の木々について説明してみるべきだと、鈴木一作PDGはおっしゃいます。私も同感です。だからこそ、無数の「一本一本の木々」の存在を念頭に「それぞれの職業奉仕物語」の企画を考えたわけです。

それでは、早速、代表的な「一本一本の木々」を見てみましょう。

1 「職業を通じて社会に奉仕する」という木

最も基本的なところですが、「我々職業人にとっては、職業こそが自分自身と社会をつなぐ接点であり、だからこそ職業に奉仕の理念を適用する」ということです。ロータリー活動を通じて「奉仕の理念」を学び、それを自分の職業に活かしていくということです。対象は、顧客や取引業者、従業員、地域、業界なども含みます。

そして、社会は「職業の連環」によって成り立っていることが分かります。

2 「職業倫理」という木

職業こそが自分自身と社会をつなぐ接点であり、だとすれば職業を通じて社会に奉仕する者としての矜持として、職業倫理を高揚させることが求められ、職業倫理の高揚が、結果的に尊敬と信頼を生み、事業は発展するのです。

3 「顧客満足を最重視する最善の経営方法」という木

顧客のニーズを最高に良くくみ取り、それを最高の形で満たすことにより、事業は発展するのです。

4 「職業は天職」という木

職業は単なる生計を得るための手段ではない。職業を通じて人格を磨き、社会に奉仕することで自己実現に至るという考え方です。職業は、天職だからこそ、崇高なもので尊重されるべきであるし、高潔さ、使命感も要請されます。

5 「職業を活かした社会貢献」という木

自己の職業上の知識や技術を活かした社会貢献を意味し、現在の国際ロータリーの職業奉仕の公式定義の一部です。

6 「四つのテスト」という木

1932年、ハーバート・テラー（シカゴRC）が経営破綻会社再建のための経営上の指針として作成し、その後、国際ロータリーの職業奉仕プログラムとして採用されました。後に、「職業人の行動規範」を超えて「人生の行動指針」として世界中のロータリアンに広く信奉されるようになりましたが、もともとは、確かに「職業奉仕の森」に生えている原木でありました。

7 それ以外の数多くの木々

以上ご説明した6本の木々以外にも、数多くの木々が「職業奉仕の森」には生えています。まだ、誰も見たことがない、誰にも発見されていない木もあるかも知れません。身近なことを題材に「それぞれの職業奉仕物語」を書いてみることで、新しい木々が発見できるかも知れませんね。